

<資 料>

知的障害を伴う自閉スペクトラム症のある子どもをもつ 母親のこだわり行動への対応に関する体験

— 回想インタビューに基づく分析を中心に —

天野 珠希*・朝岡 寛史**

本研究では、高等学校段階から成人期段階の知的障害を伴う自閉スペクトラム症のある子どもをもつ母親5名を対象に、子どものこだわり行動への対応に影響を与えた要因、ストレスを感じる状況とその対処、必要な支援に関する半構造化面接を実施した。テーマティック・アナリシス法を用いて分析した結果、対応には母親が前向きに子どもにかかわることを支える要因と、こだわり行動の直接的な制御を手放し受容へと向かわせる要因が複合的に影響した。ストレスは時間的余裕のなさやこだわり行動の持続、周囲の視線等で生じ、対処法として叱責や一時的な距離の確保、他者への相談等が語られた。支援ニーズとしては、こだわり行動の理解を促す助言、環境調整による受容の対応、こだわり行動低減のための支援が挙げられた。母親の体験は、こだわり行動の制御から受容へと至る適応プロセスとして特徴づけられ、母親の認識の転換やストレス対処を促進する包括的なアプローチの必要性が示唆された。

キーワード：知的障害 自閉スペクトラム症 こだわり行動 半構造化面接 対処法

I. はじめに

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD) は、DSM-5において「対人コミュニケーションの困難さ」と「限局的・反復的な行動や興味のパターン」によって特徴づけられる障害である (American Psychiatric Association, 2013)。その中でも、反復的行動は社会性やコミュニケーションにおける障害と比較し、改善していく割合が少ないことが指摘されており (Piven, Harper, Palmer, & Arndt, 1996)、児童期・思春期になると、強度行動障害や異常行動といった問題行動に発展する場合があるとされている (林, 2020)。ASD 児者への支援を行う場では、「反復的行動」よりも「こだわり」という名称が用いられることが多いとされる (狗巻, 2023)。稲田・黒田・小山・宇野・井口・神尾 (2012) は、ASD 児者が示す反復的行動の種類とその問題の程度を、「常同行動」「自傷行動」「強迫的行動」「儀式的行動」「同一性保持行動」「限局行動」の6つから網羅的に捉えた尺度である日本語版反復的行動尺度修正版 (Repetitive Behavior Scale-

Revised: 以下 RBS-R) を開発した。狗巻 (2023) は RBS-R の下位尺度の中でも、「強迫的行動」「儀式的行動」「同一性保持行動」「限局行動」に分類されるいくつかの行動が互いに関連し合いながら生成されていくと指摘している。これらの指摘を踏まえ、本研究では「こだわり行動」という包括的な語を用い、「強迫的行動」「儀式的行動」「同一性保持行動」「限局行動」をその下位カテゴリーとして位置づけた。

ASD のある子どもをもつ保護者は高い心的負担を抱えていると指摘されている。例えば、酒井・村上・南 (2019) は、ASD 児の母親の心的負担の特徴として、「他の障害種の子どもの母親に比べて相対的に高いこと」「子どもの問題行動に由来する心的負担があること」等を挙げている。そして問題行動とこだわり行動の関連から、保護者の視点から ASD 児者のこだわり行動を検討している研究が報告されている。

本郷・斎藤・奥住 (2017) は、子どものこだわり行動に対する保護者の捉え方や対応と子どもの学校段階との関連を横断的に検討した。その結果、こだわり行動の捉え方として、就学前では「安心感を求めている」が最も多く、高等学校段階では「それをしないと気が済まない」が最も多く見られた。こだわり行動を「変化させる」という対応は高等学校段階の子どもの保護

* 広島県立廿日市特別支援学校

** 広島大学大学院人間社会科学研究所

Table 1 子どもの属性

| 母親 | A | B | C | D | E |
|---------|---------------------|-----------------|--------------|---------------------|---------------|
| 子どもの年齢 | 19 | 16 | 21 | 16 | 18 |
| 子どもの性別 | 男 | 男 | 男 | 女 | 男 |
| 療育手帳の判定 | 中度 | 軽度 | 重度 | 重度 | 重度 |
| 就学前療育 | 保育園、発達支援センター、ことばの教室 | 保育園、デイサービス、運動教室 | 保育園、発達支援センター | 保育園、発達支援センター、療育センター | 発達支援センター、親子教室 |
| 小学校段階 | 特別支援学級 | 特別支援学級 | 特別支援学級 | 特別支援学級 | 特別支援学校 |
| 中学校段階 | 特別支援学校 | 特別支援学校 | 特別支援学校 | 特別支援学校 | 特別支援学校 |
| 高等学校段階 | 特別支援学校 | 特別支援学校 | 特別支援学校 | 特別支援学校 | 特別支援学校 |

者には見られず、就学前の子どもの保護者に多いことが明らかになった。また、Spackman, Geng, Smillie, Frazier, Hardan, and Uljarević (2025) は ASD 児者の保護者に半構造化面接を行い、こだわり行動の質的な特徴を明らかにした。大半のこだわり行動は子どもの年齢が上がるにつれて強度が増したが、行動の変更・中断に関する融通の利かなさは減少した。一部の保護者は、こだわり行動によるネガティブな影響が減少したのは保護者自身がこだわり行動に対応する方法を学んだためと回答した。さらに、こだわり行動の捉え方では「その行動が落ち着くから」「楽しいから」という回答が、その対応では「気をそらす」「時間制限を設ける」という回答が多かった。

このように、ASD 児者のこだわり行動の特徴や保護者の捉え方・対応に関する知見が示されているものの、支援の中で生じるストレス要因やニーズについて長期的な視座から検討した研究は限られている。保護者の心的負担の要因を明らかにし、効果的な保護者支援の示唆を得るためには、こだわり行動への対応を一連の継続的なプロセスとして位置づけ、その理解を深化させる知見の蓄積が必要である。

そこで本研究では、こだわり行動の対応の変遷や長期的な体験を回想によって捉えるために、高等学校段階から成人期段階の知的障害を伴う ASD のある子どもをもつ母親 5 名を対象にインタビュー調査を実施し、こだわり行動への母親の対応に影響を与えた要因を質的に検討するとともに、母親がストレスを感じる具体的な状況や支援ニーズを明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 参加者

協力者の取り入れ条件は、①子どもが知的障害と ASD の診断を受けていること、②インタビュー実施時において高等学校段階もしくは成人期段階であること、③研究内容について同意を得ることができた者とした。その結果、高等学校段階から成人期段階の ASD 児者の母親 5 名 (A, B, C, D, E) が選定された。

各参加者の子どもの属性を Table 1 に示した。A・C の子どもは成人、B・D・E の子どもは高等部在籍中であった。

母親に対し、就学前段階と現段階のそれぞれについて RBS-R を実施した (Table 2)。その際、本研究におけるこだわりの定義には当てはまらない「常同行動」と「自傷行動」の項目は回答不要とした。

各下位尺度の最大スコアは、該当項目合計数、程度合計得点の順に「強迫的行動」が 8 点と 24 点、「儀式的行動」が 6 点と 18 点、「同一性保持行動」が 11 点と 33 点、「限局行動」が 4 点と 12 点、「合計」が 29 点と 87 点である。

Table 2 RBS-R における該当項目合計数と程度合計得点

| 対象 | 下位尺度 | 該当項目合計数 | | 程度合計得点 | |
|--------|---------|---------|----|--------|----|
| | | 就学前 | 現在 | 就学前 | 現在 |
| A の子ども | 強迫的行動 | 2 | 8 | 2 | 10 |
| | 儀式的行動 | 6 | 6 | 8 | 8 |
| | 同一性保持行動 | 5 | 11 | 6 | 14 |
| | 限局行動 | 3 | 4 | 6 | 6 |
| | 合計 | 16 | 29 | 22 | 38 |
| B の子ども | 強迫的行動 | 3 | 7 | 4 | 11 |
| | 儀式的行動 | 4 | 6 | 6 | 9 |
| | 同一性保持行動 | 3 | 7 | 3 | 8 |
| | 限局行動 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| | 合計 | 12 | 22 | 15 | 30 |
| C の子ども | 強迫的行動 | 4 | 6 | 7 | 18 |
| | 儀式的行動 | 3 | 6 | 3 | 15 |
| | 同一性保持行動 | 4 | 7 | 8 | 20 |
| | 限局行動 | 1 | 2 | 3 | 6 |
| | 合計 | 12 | 21 | 21 | 59 |
| D の子ども | 強迫的行動 | 4 | 5 | 4 | 8 |
| | 儀式的行動 | 4 | 2 | 9 | 3 |
| | 同一性保持行動 | 6 | 6 | 13 | 8 |
| | 限局行動 | 3 | 2 | 7 | 6 |
| | 合計 | 17 | 15 | 33 | 25 |
| E の子ども | 強迫的行動 | 1 | 6 | 2 | 11 |
| | 儀式的行動 | 4 | 6 | 10 | 18 |
| | 同一性保持行動 | 4 | 8 | 9 | 19 |
| | 限局行動 | 2 | 2 | 6 | 5 |
| | 合計 | 11 | 22 | 27 | 53 |

2. 期間

2024年10月下旬から同年11月上旬にかけてインタビューを実施した。

3. 調査方法

インタビュー実施に先立ち、就学前段階の子どものこだわり行動に関する記録等の確認を依頼した。当日は、第一著者が作成したインタビューガイドをもとに、対象者 1 名につき 45 分～85 分の半構造化面接を対面ま

たはオンラインにて行った。RBS-Rにおいて、就学前段階と現段階ともに「行動が見られる」と回答された項目について、①その行動は就学前から現在まで一貫して見られているか、②就学前から現在までにその行動の捉え方に変化はあったか、③就学前から現在までにその行動の対応に変化はあったか、④こだわり行動に対応する上でストレスに感じたことはあるか、⑤こだわり行動に関して必要だと思った支援や有益だった支援はあったか、を質問した。なお、インタビュー項目の作成にあたっては今津・佐藤・萩野・米倉・坂爪(2007)と本郷ら(2017)の調査項目を参考にした。

4. 分析方法

テーマティック・アナリシス法を用いた。土屋(2016)に従い、まず録音したすべてのインタビューを一言一句そのまま文字データに起こして逐語録を作成した。第一著者は逐語録を熟読した後、最初にインタビューを行ったAから質問項目に沿ってコーディングを行い、その内容はMicrosoft社製Excelを用いたコードブックに記録した。作成したコードを用いながら、残りの4名のコーディングを行い、適宜コードブックを修正した。さらに、類似しているコードを統合し、生成したコードを比較して各コードを包括する概念を作成した。コードの信頼性の確保については、第一著者と第二著者が逐語録とコードブックを用いて、コーディング過程とコード、カテゴリーを検証した。

5. 倫理的配慮

対象者に口頭と書面にて研究の目的や方法、研究成果の公表、個人情報の保護について説明を行った。加えて、研究への参加は協力者の自由意思によるものであり、参加しないことによって不利益を受けることがないこと、かつ同意後であっても撤回できることを説明して書面による同意を得た。

本研究は、広島大学大学院人間社会科学研究科における研究倫理審査(請求番号:HR-ES-002130)による承認を得て実施された。

Ⅲ. 結果

インタビューで対象者から語られた内容を「こだわり行動の対応に影響を与えた要因」「こだわり行動にストレスを感じる状況と対処」「必要だと感じるこだわり行動に関する支援やサービス」の3つのカテゴリーに整理した。以下において、カテゴリーごとに対

象者の語りを整理した。コードは〔 〕で表した。

こだわり行動の対応に影響を与えた要因は、〔専門機関からの助言〕〔諦め〕〔自他に危害のない範囲で好きなことをさせたい〕〔パニックへの懸念〕〔体の大きさ〕〔将来の心配〕〔周りからのプレッシャー〕〔子どもが柔軟に対応できるようになった〕の8つのコードから構成された。対応の決定には、母親がこだわり行動に対応することを支える要因(例えば、〔専門機関からの助言〕)と、こだわり行動の制御から受容的な姿勢へと向かわせる要因(例えば、〔諦め〕)が複合的に影響していた。具体的には、〔専門機関からの助言〕では「行動の意味や背景を説明してもらい、自分自身の対応に活かした」という肯定的な経験が語られた。〔諦め〕からは「どうにもならないと感じて対応をやめた」という語りや、〔自他に危害のない範囲で好きなことをさせたい〕からは「本人の安心につながるので許容している」という肯定的な捉えが得られた。〔パニックへの懸念〕や〔体の大きさ〕からは、子どもの成長に伴い物理的・情緒的制御が難しくなり、対応が消極的になることがうかがえた。また、〔将来の心配〕や〔周りからのプレッシャー〕は社会的適応への不安を反映し、〔子どもが柔軟に対応できるようになった〕は成長に伴う肯定的な変化として捉えられていた。さらに、Cが〔諦め〕や〔パニックへの懸念〕について言及したように、一人の対象者から複数の要因が挙げられた。

こだわり行動にストレスを感じる状況と対処では、「どのようなときストレスを感じるか」として〔時間に余裕がないとき〕〔こだわり行動がしつこいとき〕〔パニックになったとき〕〔周りからのプレッシャーを感じたとき〕の4つのコードが示された。時間的な制約がある場面や同じ要求が繰り返されるときに母親はストレスを感じる事が多く、子どものパニックや周囲の視線もストレス要因として挙げられた。ストレスを感じる状況において、罪悪感を覚えたり、「もっと頑張らなければ」と自分を追い詰めたりする内面的な葛藤もうかがえた。「どのようにストレスに対処しているか」は〔叱る・厳しく言う〕〔見放す〕〔相談する〕〔実家を頼る〕の4つのコードから構成された。〔叱る・厳しく言う〕〔見放す〕からは感情を子どもにぶつけたり、一時的に距離を置いたりすることが語られた。一方で、〔相談する〕〔実家を頼る〕からは他者に相談したり、頼ったりする対応が取られていた。

必要だと感じるこだわり行動に関する支援やサービスでは、〔こだわり行動の捉え方や対応に関する助言〕

〔こだわり行動を受け入れた対応〕〔こだわり行動を低減させるための支援〕の3つのコードが抽出された。具体的に〔こだわり行動の捉え方や対応に関する助言〕では、母親自身の気持ちにポジティブな効果をもたらし、こだわり行動に応じた助言を受けることができる場の必要性が述べられた。〔こだわり行動を受け入れた対応〕では、子どもが示すこだわり行動（例えば、座席位置のこだわり）に応じた支援や配慮の提供が語られた。〔こだわり行動を低減させるための支援〕では、こだわりを断ち切ったり、新しい環境を取り入れたりするといった適応力の向上を促す支援が望まれていた。

対象者の主な語りについて、こだわり行動の対応に影響を与えた要因を Table 3に、こだわり行動にストレスを感じる状況と対処を Table 4に、必要だと感じ

るこだわり行動に関する支援やサービスを Table 5にそれぞれ示した。

IV. 考察

本研究では、知的障害を伴う ASD のある子どもをもつ母親5名を対象に、こだわり行動への対応に影響を与えた要因、ストレスを感じる状況とその対処、必要とされる支援についてインタビュー調査を実施し、質的な分析を行った。その結果、〔専門機関からの助言〕や〔子どもの成長に伴う柔軟性の向上〕のようにこだわり行動への肯定的な対応を促す要因と、〔諦め〕や〔周囲からのプレッシャー〕のように行動の制御を手放し、受容的な姿勢へと向かわせる要因が複合的に影響していることが示唆された。これらの要因は、母親がこだ

Table 3 こだわり行動の対応に影響を与えた要因

| コード | 主な語り |
|-----------------------|--|
| 専門機関からの助言 | <ul style="list-style-type: none"> 爪噛みややめさせた方がいいかなって思うこともあったんですけど、養育を受けてる〇〇（発達支援センター）の先生に、感覚の偏りのひとつで、それを辞めさすってというのは、その、お母さんの行動は辞めたほうが良いつて注意されたので。（D） 小さいときに教えていただいたのは、こういう子たちは終わりが嫌いで、もう時間の、目に見える、タイマーが0になったら、音が鳴ったら帰ろうねっていう、もう初歩的なやつですけど、あれをやったりとか。（E） |
| 諦め | <ul style="list-style-type: none"> 小学校の時に先生に指摘されて、1個ずつ食べさせてくださってたとは思んですけど。家でもうそれをしようと思ったら、いちいち文句言いながら食べさせるので。やっぱり美味しく食べれないじゃないですか。それを混ぜたらダメよ。乗せたらダメよ。こぼれるよとか。だから楽しくないから、もう本人が美味しく食べてくれたら良いやと思って、言わなくなりました、最近。（C） 諦め。そうですね。うん。諦めてるといふか。うん、なんか本人がそこで納得できるんなら、なんかもう、母心ですね。（E） |
| 自他に危害のない範囲で好きなことをさせたい | <ul style="list-style-type: none"> まあ、人には迷惑かけてないので、させてあげたいなって。（A） それも人の邪魔にならない程度で楽しんで、納得するなら良いかな、みたいな。（B） |
| パニックへの懸念 | <ul style="list-style-type: none"> まあまあ、本人が、なんていう、困らないように、なくて騒がないようにすればいいかな、みたいな。（B） 「それ汚い、外に置いて」と言ってもギャーっとなるだけなので。ギャーとならないためにも。（C） |
| 体の大きさ | <ul style="list-style-type: none"> ちっちゃい頃は、それこそもう、ぱつと連れていってしまえば、なんだろう、なんかこう、ちょっと軽いからひゅって連れていって、もうなんかごまかして気を紛らさしたりしていけたけど、おっきくなると、なんかそれはできなくなってきたんで。（B） もう体が大きくなって引っ張ることも厳しいので、もう面倒くさって思いながら連れてったりとか。（E） |
| 将来の心配 | <ul style="list-style-type: none"> なんで食べないんやろうというか、なんか、栄養状態悪すぎて、ちゃんと育たないんじゃないかっていう心配。そっちがすごいおっきくって。（B） なんかやっぱり偏食が、私も、その子長子だし、長子だし、なんか栄養バランス悪くなるから食べさせなきゃいけない（E） |
| 周りからのプレッシャー | <ul style="list-style-type: none"> 特にちっちゃい頃は、普通のラインに持っていかなきゃっていう。周りからもプレッシャーがあったし、保育園でもみんなと一緒にっていうのを常に言われてたので。（D） 長子だったし、お互いの家にとって初孫だったんですよ。で、やっぱり両家の、もうちょっと食べ、いろんなものね、離乳食ちゃんとやらなかったでしょとか、特には言わないですけど、「また白いご飯？」みたいな感じでご飯一緒に食べたりすると言われてるの。（E） |
| 子どもの成長 | <ul style="list-style-type: none"> 大体もう口頭で伝わるようになってるし。（E） |

Table 4 こだわり行動にストレスを感じる状況と対処

| カテゴリー | コード | 主な語り |
|-------------------|-------------------|---|
| どのようなときにストレスを感じるか | 時間に余裕がないとき | やっぱり、日常生活の中で、流れがあるじゃない。この生活の流れの、流れ。時間に追われとる中で、やはり、ちょっとそういうこだわり行動が出たときは、こっちもすぐストレスを感じるし、うん。(A) |
| | こだわりがしつこいとき | あまりにしつこいとやっぱりイライラするし、こっちの情緒も常に持たないじゃない。(E) |
| | パニックになったとき | そしたらもうすごいパニックになって、ずっと、夜までずっと、もう耳を押さえて、なんかわかってなったんで、普通に私が可愛いねって一言言えば済んだことなのと思つて。もうなんかそれでこっちがすごいストレスになって、なんか罪悪感。言つてあげれば済んだことなのに、この人がずっと嫌な思いしてしまつたっていう。それでまたストレス。(C) |
| | 周りからのプレッシャーを感じたとき | 周りから言われることで、もう私もストレスになって。頑張らないといけないなと思つたんですけど。(E) |
| どのようにストレスに対処しているか | 叱る・厳しく言う | そんなときは、もう、お母さん、もう、あの、嫌な気持ちになるけん、もう、やめてくださいとか、もうやめてってそこは厳しく、きつく言うときもある。(A) |
| | 見放す | ちょっと、もう今は無理やから、もうじゃあ行つてるから、後で追いかけてくるとか、じゃあもうお留守番しとくとか。(B) |
| | 相談する | その人に話すことで、自分自身のちょっとそういうストレスは解消して。(B) |
| | 実家を頼る | 結構、こっそり、昼間だけ実家に行くつていう。で、そこで、母に話聞いてもらつたり、なんか、一緒に食品売り場歩くつていうのがすごいストレス発散になって。(D) |

Table 5 必要だと感じるこだわり行動に関する支援やサービス

| コード | 主な語り |
|-------------------|--|
| こだわりの捉え方や対応に関する助言 | <ul style="list-style-type: none"> • なんかその辺が、私は、その保育園の先生とか学校の先生が、そういうこだわりはすごくこう、別に心配しなくてもいい風に捉えたり、例えば、さっきの話だけど、その災害時充電満タンにしなあかんとかいうこだわりも今もあつて、なんかそれも、それにしてたら災害時困らへんよとか、荷物に関しては困らへんよとか。まあ、親、親つていうか、関わる方、関わる方としては、なんかそういう、なんかちょっとこう、プラスの変換してもらえ、アドバイスもらえるようなことがあると、すごくやっぱり気持ちが楽になるし、子ども本人に関しては、やっぱりそれを、なんで、なんでそうなるかつていうのをわかつてあげれることがすごく大事で。(B) • でも無理な時と、なんかこう、付き合つてあげられないこだわりを、ちょっと切り替えなあかんところの、そこの、こう、切り替えがスムーズに行くような、なんかこう、まあ言つたら、そういう、なんかこうね、知識、知識というか、アドバイスを受けれるところがあれば。(B) |
| こだわりを受け入れた対応 | <ul style="list-style-type: none"> • 学校の先生とかが出てきて、「どしたん、〇〇くん(Aの子ども)」とつて、そしたら支援級の先生らも出てきて、「じゃあ学校でちょっとあのお部屋で遊んでから帰りんさい」つて、学校で遊ばせてもらつて帰つたりとか。(A) • 言い聞かせる部分で、普段の中ではやっぱり事前に先生に話して、もう座席を決めるときになんかもうこの位置つて結構決めてくれはる配慮をしていただいたので、目が悪いのもあつたから、前の前のね、なんか端が好きやから、この端とか、なんかもうそこは学校の配慮があつて、基本、やっぱり座席の位置を変わらないようにくたさつたので。同じ位置にこだわりの子が、まあ、たまたまいなかつたのが幸いで。(B) |
| こだわりを低減させるための支援 | <ul style="list-style-type: none"> • もう、こだわりを逆に断ち切つてほしい場合もあるし。あと、全然、例えば〇〇(ショートステイ)のお泊まりだけは何も持つていかないから。すつごい早く寝るみたいだし。もう、なんかそういう風にこだわりを断ち切つてほしい部分もあります。(C) • デイにやっぱり行き始めたら、やっぱりいろんなとこ連れてつてくださるので、その辺で、行き渋りというか、新しい場所つていうのは減つていつたつていうか、伝えてもらつて克服してつたつて感じかな。(E) |

わり行動をどのように捉え対処するかに影響し、心的負担やストレスと密接に関連していると考えられる。本郷ら（2017）が明らかにしたように、母親の対応は子どもの発達段階や行動の特性に応じて変化しており、こだわり行動への支援は母親の視点やニーズを考慮した柔軟なアプローチが不可欠である。本研究の結果は、母親がこだわり行動を単純に「制御」する対象として捉えるに留まらず、長期的な視点で「共存」する方法を模索する中で、自身のメンタルヘルスを維持しようとしてきた心理的な適応のプロセスを反映しているといえよう。以下では、要因間の相互作用、母親のストレス体験とその対処法、支援ニーズについて考察する。

こだわり行動への対応に影響を与える要因に関して、多様な要因が複雑に絡み合っていることは、母親がこだわり行動をどのように意味づけ、どのような対応を選択するかに影響を与えたと考えられる。特に、〔専門機関からの助言〕はこだわり行動の背景や意味を理解することで、母親が行動を肯定的に捉え直す契機となり、対応の柔軟性を高める要因として機能していた可能性がある。このことは、Spackman et al. (2025) において、保護者がこだわり行動への対応方法を学ぶことでネガティブな影響が軽減したという結果からも裏づけられる。一方で、〔諦め〕や〔パニックへの懸念〕といった要因は、母親がこだわり行動を変えようとする試みを断念させる、表面的にはネガティブな側面を有していた。しかしながら、参加者の語りを深く分析すると、この〔諦め〕は単なる無力感や敗北感に留まるものではなく、行動の制御を手放すことが、同時に子どものありのままの状態を許容し、母親自身の心理的負担を軽減するという、適応的な側面を有していることが推察される。本郷ら（2017）はこだわり行動を変化させる対応は高等学校段階に減少することを指摘している。この指摘を踏まえると、母親はこだわり行動の完全な制御は困難であることを学習し、子どもの発達段階や身体的成長に伴う変化（例えば、〔体の大きさ〕）も相まって、〔専門機関からの助言〕を仰ぐという方略から、〔諦め〕や〔自他に危害のない範囲で好きなことをさせたい〕といった方略にシフトさせている可能性がある。「もう本人が美味しく食べてくれたら良いやと思って、言わなくなりました、最近。(C)」〔諦めてるといふか。うん、なんか本人がそこで納得できるんなら、なんかもう、母心ですね。(E)〕という参加者の語りからも、このシフトがネガティブな面だけでなく、母親のメンタルヘルス

の維持に役立つといったポジティブな面も有していると考えられる。

こだわり行動にストレスを感じる状況と対処に関して、時間的な余裕やこだわり行動の頻度・強度、周囲の視線という環境要因が母親のストレス体験を特徴づけている。〔時間に余裕がないとき〕や〔こだわり行動がしつこいとき〕には、「問題行動に由来する心的負担（酒井ら, 2019）」が時間的圧力によって増幅され、母親は〔叱る・厳しく言う〕といった感情的な反応を示しやすくなることが推察される。例えば、Aは「やっぱり、日常生活の中で、流れがあるじゃない。この生活の流れの、流れ。時間に追われとる中で、やはり、ちょっとそういうこだわり行動が出たときは、こっちもすごくストレスに感じるし、うん。」「そのときは、もう、お母さん、もう、あの、嫌な気持ちになるけん、もう、やめてくださいとか、もうやめてってそこは厳しく、きつく言うときもある。」と語っており、時間的な余裕のなさが感情的な対応を誘発する様子が見える。さらに、〔パニックになったとき〕や〔周りからのプレッシャーを感じたとき〕には、子どもの情緒的混乱や周囲の視線が母親の自己効力感を低下させ、〔見放す〕といった回避的対応を誘発することが推察される。一方で、〔相談する〕や〔実家を頼る〕といった社会的支援の活用は、母親が単独で問題を抱え込まず、外部資源を積極的に利用することで心理的負担の軽減を図っていることを示唆する。

必要だと感じるこだわり行動に関する支援やサービスに関して、母親は「捉え方や対応に関する助言」「受け入れた対応」「低減させるための支援」という3つの側面から多様なニーズを表明した。Bが「プラスの変換をしてもらえる、アドバイスをもらえるようなことがあると、すごくやっぱり気持ちが楽になる。」と語るように、行動の意味理解が母親の心理的負担の軽減に寄与することが示された。このことは、保護者自身がこだわり行動に対応する方法を学ぶことの効果（Spackman et al., 2025）とも一致する。また、「端が好きやから、この端とか、なんかもうそこは学校の配慮があって、基本、やっぱり座席の位置を変わらないようにくださったので。(D)」という語りがあるように、環境調整によるこだわり行動の受容的対応の必要性も示唆される。低減させるための支援については、応用行動分析学の技法を用いた系統的アプローチの有効性が確立されている。例えば、周囲の制止を引き起こす問題的な行動要素を同定した上で、機能的アセスメントに基づいて、それらの行動要素の生起を防止し、

適切な行動を生起させるように先行条件を改善する支援が考えられる(平澤・馬場, 2011)。

以上のことから、知的障害を伴う ASD のある子どもをもつ母親のこだわり行動に関する体験は、子どもとの長期的な関係性の中で「制御」から「受容」へと至る心理的適応のプロセスとして理解できよう。母親は、専門機関からの助言や子どもの成長といった要因と、諦めや周囲からのプレッシャーといった要因の間で絶えず折り合いをつけながら、こだわり行動との向き合い方を模索してきた。この過程で見られた「諦め」とも捉えられる対応は、無力感や断念というよりも、むしろ白石(2013)が指摘するこだわり行動のポジティブな側面を見いだす適応的な転換ともいえ、母親のメンタルヘルス維持に寄与する可能性がある。こだわり行動への支援において、行動変容のみを目指すのではなく、母親の認識の転換を促し、ストレス対処能力を高め、個に応じた支援を提供する包括的なアプローチの必要性を示唆している。

本研究では母親がこだわり行動との長期的な関わりの中で体験をどのように意味づけ、対応していくかについての理解が深められた一方で、いくつかの点で課題が残された。第一に、参加者が知的障害を伴う ASD のある子どもをもつ母親 5 名に限定されているため、得られた知見は主たる養育者である母親と子どもとの二者関係という特定の文脈に強く結びついている。そのため、家族全体のダイナミクスが十分に捉えられていない可能性がある。今後の研究では、父親やきょうだい、異なる障害の程度や文化背景をもつ家族等、多角的な視点からこだわり行動への対応に関する体験についての理解を深めることが期待される。第二に、回想によるバイアスが否定できない。就学前のこだわり行動やその対応については過去を振り返っての報告に依存しているため、記憶の歪みや現在の状況による解釈の影響を受けている可能性がある。この限界を補い、こだわり行動への対応が時間経過とともにどのように変化するかを捉えるためには、子どもの発達段階に沿って複数回のインタビューを行う長期縦断的なアプローチの採用が有効であろう。第三に、母親の心理的プロセスを十分に捉えることができなかった。例えば、専門機関からの助言や子どもの成長といった要因が、どのような認知や心情の変化を経てこだわり行動の「受容」につながるのか、その内的メカニズムは依然として不明確である。今後の研究では、このような心理的プロセスに焦点を当てた詳細な分析や、母親のレジリエンスに着目した検討を深めることで、

保護者支援により直接的に貢献する知見が得られると考えられる。

謝辞

本論文の作成にあたり助言を賜りました岡村章司先生と宮田賢吾先生、ならびにインタビューにご協力くださいました参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- American Psychiatric Association (2013) *Diagnostic and statistical manual of mental disorders, fifth edition*. American Psychiatric Publishing, Washington, DC.
- 林恵津子 (2020) 自閉スペクトラム症 (ASD) の情動行動. 臨床精神医学, 49(11), 1783-1790.
- 平澤紀子・馬場 採 (2011) 自閉症児のこだわり行動への支援に関する研究：問題的な行動要素に関する先行条件の改善から. 岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 59(2), 225-231.
- 本郷 薫・斎藤遼太郎・奥住秀之 (2017) 保護者から見た自閉症スペクトラム障害児のこだわりの捉え方とその対応. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 68(2), 163-173.
- 今津芳恵・佐藤倫子・萩野佳代子・米倉康江・坂爪一幸 (2007) 自閉症児の親のストレスならびに支援ニーズの把握に関する研究 I : 発達段階による比較. 日本教育心理学協会発表論文集, 49, 728.
- 稲田尚子・黒田美保・小山智典・宇野洋太・井口英子・神尾陽子 (2012) 日本語版反復的行動尺度修正版 (RBS-R) の信頼性・妥当性に関する検討. 発達心理学研究, 23(2), 123-133.
- 狗巻修司 (2023) 自閉症スペクトラム障害児における「こだわり」の生成と変容プロセスの検討. 人間文化総合科学研究科年報, 38, 1-16.
- Piven, J., Harper, J., Palmer, P., & Arndt, S. (1996) Course of behavioral change in autism: A retrospective study of high-IQ adolescents and adults. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 35(4), 523-529.
- 酒井和香・村上理絵・南 恭子 (2019) 自閉症児の母親が感じる心的負担に関する先行研究の概要. 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践セン

- ター研究紀要, 17, 1-9.
- 白石雅一 (2013) 自閉症スペクトラムとこだわり行動への対処法. 東京書籍.
- Spackman, E., Geng, A., Smillie, L. D., Frazier, T. W., Hardan, A. Y., & Uljarević, M. (2025) Characterising insistence on sameness and circumscribed interests: A qualitative study of parent perspectives. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 55(8), 2896-2908.
- 土屋雅子 (2016) テーマティック・アナリシス法：インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎. ナカニシヤ出版.
- (2025. 12. 08受理)

Mothers' Experiences Coping with the Restricted and Repetitive Behaviors of Children with Autism Spectrum Disorder and Intellectual Disability: An Analysis Focusing on Retrospective Interviews

Tamaki AMANO

Hatsukaichi Special Needs Education School

Hiroshi ASAOKA

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University

This study conducted semi-structured interviews with five mothers of children with autism spectrum disorder and intellectual disability; the children ranged from high school age to adulthood. The interviews explored factors influencing mothers' responses to their children's restricted and repetitive behaviors (RRBs), situations in which they experienced stress and their coping strategies, and the types of support they considered necessary. Thematic analysis revealed that coping was influenced by a combination of factors that supported mothers' positive engagement with their children and factors that led them to shift from directly controlling RRBs toward acceptance. Stress commonly arose from time constraints, the persistence of RRBs, and social pressure. Coping strategies included reprimanding, taking temporary distance, and seeking advice. Reported support needs included guidance for understanding RRBs, strategies for creating supportive environments, and assistance aimed at reducing RRBs. Overall, mothers' experiences were characterized as an adaptive process of shifting from controlling to accepting RRBs. This suggests the importance of comprehensive approaches that promote cognitive reframing and stress management among mothers.

Keywords: intellectual disability, autism spectrum disorder, restricted and repetitive behaviors, retrospective interviews, coping strategies

